

原生林保護から二次的自然の保護へ

土田勝義 (当基金評議員・信州大学名誉教授)

私が始めて自然保護運動に関わった時代（1970年代）は、自然破壊といわれた開発事業が、高度成長の推進力となって、あるいはそれに伴って全国的に盛んに行われた。当時は尾瀬の車道、南アルプスのスーパー林道、北海道の大雪山車道など、観光開発の尖兵となる山岳車道建設計画などが大きな話題となった。私は長野県松本市に在住していたが、ちょうど松本市の頭に当たるような東にそびえる美ヶ原高原に、諏訪地方の霧ヶ峰から延伸するビーナスライン美ヶ原線という観光道路が建設されようとしていた。ここでも全国各地の観光道路と同様、強い反対運動が起こり、私も美ヶ原の植生を研究していたので当事者として諏訪の医師青木正博氏（霧ヶ峰のビーナスライン八島線建設の反対運動を描いた新田次郎作「霧の子孫たち」の主人公）らとともに反対運動のリーダーの一人として参加した。



森林化が進む霧ヶ峰の草原
右側が八島ヶ原湿原。中央上部の道路はビーナスライン八島線。

自然保護派は反対理由に色々苦心するが、八島線では国の天然記念物の八島ヶ原湿原の自然破壊が懸念されるということ、美ヶ原線では、美ヶ原の原生林と、高山植物が生育する自然の風衝植生が車道通過によって破壊されるというものであった。大体どこの自然保護運動も原生林とか高層湿原とか高山植生とかいわゆる自然植生が破壊されることを主たる理由とした。本当はそれが本質ではないが、耳目を引くPRの材料となった。そして原生林という、千古斧が入っていない貴重な自然の宝を壊すものは自然破壊者として糾弾された。そのためいくつかの道路計画は取りやめになったり、路線が変更された。美ヶ原線もダケカンバ二次林を通過する路線に変更となり建設された。その後、低成長時代に入り特に観光開発は低調となり、山岳地帯の開発はほとんどなくなった。私も当時、原生林（原生的自然）保護至上主義者であった。

また当時、里山など薪炭林が放置されるようになり、次第にこれらの二次林が発達してきてやがては極相林となって原生林化することを期待した。当時これらは潜在自然植生として位置づけられ、その地域の自然の復元、再生の理論的根拠が与えられた。

ところが、1990年代となって、以前からIUCNによって提唱されていた絶滅危惧種の提示とその保全に関する考えが世界的に広まり、わが国でも学会や環境省等で全国の絶滅危惧種のリストアップとランク付けとしてのレッドデータブックが作成された。また生物多様性という面から、自然保護の対象が見直されるよ

(☞4ページに続く)

平成23年度 助成事業報告（見込み）

助成総額（予算）2,200万円

●共同助成事業

I. プロ・ナトゥーラ・ファンド第22期助成

（日本自然保護協会との助成事業 [公募型]）…内容は次頁	21件	1,820万円
	予算	1,800万円

II. ナショナル・トラスト活動助成

（日本ナショナル・トラスト協会との助成事業 [公募型]）	3件	（未定）
	予算	200万円

●自主助成事業

III. 直接助成（当基金が緊急且つ重要と認める自然保護に資する各種助成）

		（未定）
	予算	200万円

訃報

評議員の岡部牧夫氏は、平成22年12月6日に逝去されました。岡部牧夫氏は財団創立の平成5年4月より評議員を務められ、当財団の発展に多大な貢献をされました。

人事異動

平成15年5月以来、評議員として当財団の発展に多大な貢献をいただいた小林 光氏（財団法人自然環境研究センター）は、平成23年11月30日をもって退任されます。

平成23年1月20日より、当財団参与に、高島輝久が着任致しました。

ウェブサイト／メールアドレスの変更

当財団のウェブサイトを一新しました。URLも変更となりました。過去のPNニュースや、プロ・ナトゥーラ・ファンド助成成果報告書、当財団による助成の成果報告書、各種パンフレット、事業報告が公開されております。どうぞご活用下さい。

●ウェブサイト <http://www.pronaturajapan.com/>

財団事務局のメールアドレスも変更になりました。今後、ご連絡いただく際は、こちらのアドレスをご利用下さい。

●メールアドレス office@pronaturajapan.com

新職員紹介

自己紹介

高島輝久



当基金に今年の2月から勤務しております高島です。年初にかつての職場の上司の岡本専務理事から声を掛けていただいたのがきっかけで、迂闊にも初めて当基金の存在、趣旨を知り、たちまち共感を覚えて、一員に加えていただきました。私には未経験の分野で、新鮮な気分で行っています。勤め始めてここまで、当基金の公益法人移行認定の申請手続きに時間を集中してきました。趣味は山歩きです。自己流のアマチュア登山で、プロ登山家には疎んぜられる日本百名山を足かけ40年で完登しました。単独行が好きで、危うい場面もいい思い出になっています。その途上で高山植物や動物にも関心が広がり、野鳥や草花、樹木など自然観察が楽しみになりました。もともと環境保護には関心を払ってききましたが、自然保護の領域には全く乏しい知見しか持ち合わせていません。今後少しでも皆様のお役に立つよう努力していく所存です。どうぞよろしく申し上げます。（たかしま てるひさ）

★羽は生えていませんが鳥とお話しできる人です。これで当財団も有賀祐勝 理事長（海）、岡本寛志 専務理事（陸、植物）、高島輝久 参与（鳥）と3拍子揃いました。（岡本和子）

プロ・ナトゥーラ・ファンド 第22期 助成先一覧

■国内研究助成 10件 小計976万円

(万円)

No.	テーマ	グループ名	代表者名	申請額	助成額
1	有明海再生への第一歩 — 諫早湾長期開門調査前後の水質・底質・底生動物群集変化の解析	諫早湾保全生態学研究グループ	佐藤 慎一 (東北大学総合学術博物館 助教)	56	56
2	千葉県で新たに発見された絶滅危惧植物スズカケソウ集団の遺伝的多様性解析と保全	市民・県・大学の三者連帯によるスズカケソウ保全チーム	上原 浩一 (千葉大学大学院園芸学研究所 准教授)	150	130
3	大東諸島の固有生物相を支えるダイトウビロウの保護に関する緊急調査	大東諸島生物相研究グループ	伊澤 雅子 (琉球大学理学部 教授)	132	100
4	極東ロシアにおけるシマフクロウ個体群の分布調査と日本産個体群の遺伝的特徴との比較研究(継続)	北方鳥類多様性研究グループ	竹中 健 (シマフクロウ環境研究会 代表)	127	107
5	周伊勢湾地域の里山に生育する湿地性絶滅危惧植物の景観遺伝科学的解析	里山湿地研究グループ	佐伯 いく代 (横浜国立大学大学院環境情報研究院 博士研究員)	130	130
6	対馬の山頂部岩角地にのみ分布するツシマノダケ(セリ科)の保全に関する基礎的調査と対馬集団の分類学的固有性の評価	ツシマノダケ研究会	東 浩司 (京都大学大学院理学研究科 助教)	84	84
7	主要組織適合複合体(MHC) 遺伝子解析による絶滅危惧種イトウの遺伝的構造・多様性の評価及び遺伝的保全指標を含む統合的保全策の提言	イトウ生態保全研究ネットワーク	江戸 謙顕 (文化庁文化財部 文化財調査官)	149	149
8	ツシマヤマネコと共生する環境配慮型農業の生息環境保全効果および社会経済的效果に関する研究	佐護ヤマネコ稲作研究会	大石 憲一	110	70
9	房総半島で生じているアライグマによるニホンイシガメへの被害調査	千葉県の野生生物を考える会	小賀野 大一 (千葉県立市原高等学校 教諭)	92	85
10	伊豆諸島八丈島における外来種ニホントカゲの侵入による在来種オカダトカゲ絶滅リスク評価	島嶼生物学研究会	岡本 卓 (国立環境研究所 生物・生態系環境研究センター 特別研究員)	86	65

■国内活動助成 7件 小計507万円

(万円)

No.	テーマ	グループ名	代表者名	申請額	助成額
1	生物多様性のホット・スポット“上関フィールドツアー”	長島の自然を守る会	高島 美登里	100	100
2	千葉県南部に侵入した特定外来生物ナルトサワギクの海岸侵入防止と駆除	安房生物愛好会 環境部会	小林 洋生 (安房生物愛好会 事務局長)	101	101
3	伊豆諸島新島・式根島・神津島の植生誌編纂(継続)	伊豆諸島植生研究グループ	八木 正徳 (東京都立墨田川高等学校 教諭)	51	51
4	過去の山岳環境の記録としての写真データベースの作成	日本山岳会自然保護委員会	下野 綾子 (筑波大学 遺伝子実験センター 助教)	99	99
5	海の博物学者になろう～アマチュア博物学者のためのハンドブック作成～	「海岸へ行こう」実行委員会	山本 智子 (鹿児島大学水産学部 准教授)	86	66
6	伊豆半島南東端の浅海魚類相の変移に関する調査報告書の作成	伊豆の魚を考える会	竹内 直子 (東海大学海洋学部 非常勤講師)	32	32
7	鳥の色から生物多様性の価値を提示する一般市民向けシンポの開催	日本鳥学会企画委員会	三上 修 (岩手医科大学 共通教育センター 助教)	58	58

■海外助成 4件 小計337万円

(万円)

No.	テーマ	申請者名	推薦者名	申請額	助成額
1	絶滅危惧種マレーセンザンコウの保全に関する研究	松林 尚志	安田 雅俊 (森林総合研究所 主任研究員)	80	80
2	改変・断片化されたサバ州内の森林での霊長類の分布	Henry Bernard	半谷 吾郎 (京都大学霊長類研究所 准教授)	88	88
3	ペルーにおけるウミガメ類の危機的な生息域の精査と保護活動	Ximena Velez-Zuazo	菅沼 弘行 (エバーラスティング・ネイチャー 会長)	80	80
4	マレー半島の熱帯山地性雲霧林におけるコケ植物の生育立地選択と空間的分布および多様性	楊 建泰	古木 達郎 (千葉県立中央博物館 植物学研究科長)	89	89

合計 21件 総額1,820万円

うになった。植物でいえば、植生の保全というより、種や遺伝子の保全が自然保護の主流となった。その面で見ると、里山、草原、田畑とか人が常に関わってきた二次的自然は、生物多様性が高く、また絶滅危惧種も沢山あるということで貴重な自然となった。私は、もともと草原生態学が専門なので、このような二次植生の保全にも納得はできたが、原生的自然や群落レベルの自然を保護の対象として強く意識してきたものとしては、大変戸惑ったものである。実際、最近では一部地域を除き原生的

自然はあまり開発の対象とはなっていないので、生物多様性の保全が自然保護の主流であってもとくに問題はないと思われるが。私は今でも霧ヶ峰や美ヶ原の草原を調査しているが、二次草原特有の絶滅危惧種が沢山（個体数は少ない）見られる。ただ原生的自然は、人手を加えず厳正保護されているだけで半永久的に存続しているが、上記の草原も森林化が進んでおり、二次的自然は常に人の手を入れないと存続できず、動植物を含め、生育種の存続は非常に困難であることを実感している。

平成22年度決算ならびに 平成23年度予算

平成23年3月11日の理事会・評議員会にて、平成23年度の事業計画、収支予算案が承認されました。また平成23年5月13日に開催された理事会・評議員会では平成22年度の事業報告、決算報告が承認されました。決算と予算は右表の通りです。

第17回 プロ・ナトゥーラ・ ファンド助成成果発表会

- 日 時：平成23年12月10日（土）
9:55～16:55（終了後懇親会）
- 場 所：こどもの城 8F
(801～804研修室)
TEL 03-3797-5677
渋谷区神宮前5-53-1
- 主 催：自然保護助成基金
日本自然保護協会
- ★参加費無料、申し込み不要です。どなたでもご参加いただけます。直接会場へお越し下さい。途中参加も可能です。詳細は当財団ホームページ（<http://www.pronaturajapan.com>）をご参照下さい。

平成22年度決算ならびに平成23年度予算

(単位：円)

項 目	平成22年度		平成23年度
	予 算	決 算	予 算
(収入の部)			
基本財産運用収入	27,500,000	30,410,990	19,620,000
運用財産運用収入	50,000	21,071	20,000
雑収入	0	144,500	0
基本財産評価損積立預金取崩収入	30,000,000	30,000,000	0
収入合計	57,550,000	60,576,561	19,640,000
(支出の部)			
事業費	59,810,000	45,930,801	40,400,000
PNファンド公募助成	(20,000,000)	(19,720,000)	(18,000,000)
ナショナル・トラスト活動助成	(10,000,000)	(6,900,000)	(2,000,000)
緊急且重要な直接助成	(10,000,000)	(2,300,000)	(2,000,000)
事業管理費	(19,810,000)	(17,010,801)	(18,400,000)
一般管理費等	8,140,000	8,715,332	8,600,000
特定預金支出	400,000	400,000	400,000
予備費	300,000	0	300,000
支出合計	68,650,000	55,046,133	49,700,000
前期繰越収支差額	25,230,449	25,230,449	30,760,877
次期繰越収支差額	14,130,449	30,760,877	700,877

編 集 後 記

あの恐ろしい3月11日の「東日本大震災」の日は、皆様どこでどういうふうにお過ごしでしたのでしょうか。津波の物凄さ、災害に逢われた方々のことを思うと、素直に無事でよかったとも言えない気もいたします。このところ毎年のように起こる様々な災害はやはり地球の怒りのせいだと思われまます。どうしたらこの怒りを静めることができるでしょうか。真剣に考えなければなりません。でもこの機会に節電、節水の習慣は、ずっと続けていきたいものです。

さて、当財団もお蔭様で公益法人の財団に移行出来る認定を取得できる見通しがたちました。これを機会にますます張り切って事業を延ばしていきたいとは思いますが、なにせこの不景気で財源はいよいよ乏しくなり事業は縮小せざるを得ない状況です。でも考えようによっては、今後より厳しい審査をくぐり抜け選ばれた方々は胸を張って一生懸命に頑張ってくださいと思います。例年の決まり文句、来年こそは穏やかな良い年になりますよう念じつつ今年のしめくりと致します。(岡本和子記)

Pro Natura ニュース 第21号

発行者：財団法人 自然保護助成基金

発行日：平成23年11月25日

〒150-0046

東京都渋谷区松濤1-25-8

松涛アネックス 2階

TEL：03-5454-1789

FAX：03-5454-2838

E-mail office@pronaturajapan.com

<http://www.pronaturajapan.com>